

---

# こいねこ

北島夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こいねこ

### 【コード】

N3302Z

### 【作者名】

北島夏

### 【あらすじ】

幼いころに両親を失い、いつもふたりきりで過ごしてきたナオとみなも。

ある日突然、みなもの手が、猫の手に変わってしまいます。

あわてるナオとは反対に、みなもはというと、かわいいかわいいとのんきなもの。

ためいきをつくナオですが、そんなナオにも驚くことが起きます。

片思いの女の子にいきなり告白をされたのです。

クリスマスが近づく冬の日々を舞台にした、淡い恋物語です。

( 1 )

「かき揚げそばと季節のご飯セット」

「だめだよお。ナオちゃんはカレイの煮つけご飯だよお」

「魚嫌いなんだよ」

「でも順番だもん。順番守らないとわたしがカレイの煮つけご飯だよお」

「好き嫌いは良くない」

「ナオちゃんだって。えへへ、わたしは、かき揚げそばと季節のご飯セット」

「むー」

ここに来たときには毎回座るいつもの席。店員さんを呼んで、注文を済ませる。

しょうがない。嫌いだけど今日は魚だ。好き嫌いしていたら、このファミレスの全メニュー制覇なんてできないしな。

デザートに紅茶のシフォンケーキを追加してご機嫌のみなもから目を移して、窓の外を見る。

町はクリスマスカラー一色だ。緑と赤と白。通りの並木にはいろいろどりの電飾がまたたき、商店街の店先やショーウィンドウにはクリスマスツリーが飾られ、サンタやトナカイ、ふわふわの白雪のイラストや小物がにぎわっている。店から出て、通りを駅のほうにずーっと見晴るかせば、もちろん、何百万ドルの、とはいかないけど、思わず見とれてしまうクリスマスイルミネーションが続いているはずだ。

「……クリスマスだなあ」

「クリスマスだねー」

いつの間にか、僕と同じく窓の外を眺めていたみなもが、セミロ  
ングのふわふわくせつけをゆらして、僕の何気ないつぶやきに同意  
する。

あいかわらずのにこにこおっとり口調。子供のころからずっとみ  
なもはこんな調子で僕のとりにいる。子供のころって言うか、生  
まれたときから、だな。僕とみなもは同じ日に同じ病院で生まれた。  
そしてとなり同士のベビーベッドに寝かされたのだから。

ほんと、くされ縁。いつまで続くんだろうね、僕たちは。

窓からみなもに顔をもどし、そんなことをふと考える。

みなもも窓から目をもどし視線が合うけど、べつに、なあに？  
とも訊いてこない。

とくになにか言いたくて見ていたわけじゃないことなんて、お互  
い目を見れば一瞬でわかるから。

……なんだかもう熟年夫婦の域だけど、でもそれも当然かな。

お互いもう両親を亡くしてから何年も経つ。それからずっと、ふ  
たりだけの家族のようにして育ってきたんだから。

「クリスマス、今年はナオちゃんち？」

「うん。去年はみなもんちだったからね」

家族のように、兄妹（僕のほうが十分くらい先に生まれた）の  
ように育ってきたから、クリスマスも毎年一緒だ。となり同士の家  
だから、どっちでパーティをやっても変わらないのだけど、いちお  
う交代交代、お互いの家で開いている。ささやかな代わり映え、か  
な。

「チャンスだよ！ クリスマスなんてこのうえなくいい機会なんだ  
から、告白しなよ。いまのまんまじゃ話だってまともできないん  
だよ？」

背中越し、となりのとなりくらいに離れた席から威勢のいい声が  
聞こえてくる。女の子の声。きつと僕たちと同じくらいの年頃の。  
話し相手の子の声は喧騒にまぎれて僕の耳までは届いてこない。

「わたしもがんばるから。ね、一緒にがんばろっ！」

そんな会話が続けている。

ファミレス店内を見まわすと、もうすぐクリスマスなのに関係あるのかないのか、いつもは家族連れが多いのに、今日は恋人同士っぽいカップルがけっこうちらほら。意識してみれば、そういうところはとろろとカップル率が高かった気もする。

クリスマスイヴって、そういうイベントの日なんだから。

僕にとってはいつもみなもととささやかなプレゼント交換をして、ちよつとおいしいものを食べる日だけで、どきどきする出来事なんかとは無縁なただけ。

「……クリスマスってさ」

「クリスマス？」

僕の間を見直して、小首を傾げるみなも。

と、そこで僕は、うーんと考え直す。

みなもとクリスマススカップルや恋愛の話？

照れくさくて、無理無理。

「んー、やっぱりいい」

「むう。あ、かき揚げそばと季節のご飯、来たー」

途中で話をやめた僕に一瞬不満そうな顔をするけど、すぐに運ばれてきた料理に気をとられるみなも。

「ナオちゃんにも分けてあげるからね」

「みなもにも煮つけ分けてあげるよ」

「それはいらないよお」

僕のカレイの煮つけも運ばれてきて、いつもと同じ、ふたりで味見をしいながらの食事が始まる。いつもどおり、これがおいしいあれがおいしい、これもうな、あ、だめだよお、なんて話しながら。

でもクリスマスかあ。

僕にだって気になっている子がいないわけではないけど、今年もいつもと同じ、みなもとふたりきりのクリスマスなんだろうな。

「あ。猫さんだよ、ナオちゃん」

やっぱり連日のファミレス通いってお金かかるよなあなんて思いながらの帰り道、街路灯に照らされた民家の塀のうえに白い猫を見つけた。

大通りからはずれた住宅街の道筋。静かな夜に白い毛並みは輝くようでもとても綺麗だった。

姿勢よく座って闇夜のどこかを見つめていた白い猫は、僕たちが立ち止まると、恐れて逃げることもなく、こちらを向いて、にゃあ、と鳴いた。

「かわいいよあ、ナオちゃん。こんばんはー、猫さん」

僕にはあつと笑顔を向けてから、みなもは猫に歩み寄る。

みなもがそつと手を近づけると、猫はぺろつと舌先でなめる。

「きゃう。かわいいかわいいかわいいよあー！」

「猫だからねー」

「猫さんだからかあ。ふわあ、もうもうもつもつかわいいよあー！」

白猫は人慣れしているのか、目を細め、ごろごろと喉を鳴らして、みなもに撫でられるがままになっている。「にゃんにゃん。にゃにゃん？ にゃあーん」

「なんだって？」

「ご機嫌に猫語を操るみなもにのってあげる。」

「魚嫌いはだめだよ、つて」

「それはみなももだろ」

そんなことを話していると、白猫は、ふ、と誰かに呼ばれたように闇に沈んだ路地の先に顔を向ける。そしてあつという間に身をひるがえして、僕たちの前から去ってしまふ。

「行っちゃった」

「行っちゃったね」

僕は少しの間、猫の消えた闇を見つめていた。夜の白猫なんて、

なんだかちよつと幻想的な光景だったな、なんて思いながら。

みなもはというと、ぼーっとした表情でやっぱり猫の消えた闇を見ていた。みなもがぼーっとしているのはよくあることだけど。…

…と思っていたら、急に、

「猫さんはいいなあ」

とぼつりともらず。遠いどこかを見ているような、夢見ているような、そんな声。

なんだろう、とちよつといつもとちがうみなもを感じた気がしたけど、僕はコートの襟を正しながら、その言葉を聞いてまず思ったことを率直に言った。

「……いまの季節、寒いと思うけど？」

さっきの猫、首輪がついてなかったけど、寒い冬の夜はどうやって過ごしているんだろう。

「ううん。いつでもこうしてられるから、寒くないんだよ」

そう言っつて、みなもは僕のポケットのなかに冷たくなった手を入れてきて、僕の手を握る。

「わ。冷たっ」

「心があつたかい証拠なんだよあ」

にはあとなにがそんなにうれしいのか、しあわせそうにみなもは笑う。

「ずーっとこうしていたいなあ」

「なに言っつてんだか」

ずつとこうしてきたでしょーが。いつもふたりで。

結局、猫のことがうらやましいのと手をつなぐことになんどの関係があるのかはさっぱりわからなかったけど、だんだんぬくぬくとしてきたみなもの手はあたたかくて、僕たちはそれからずつと手をつなぎながら、家まで帰った。

(2)へ続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3302z/>

---

こいねこ

2011年12月11日13時48分発行